

人間工学に基づいた危険が伝わるコミュニケーション・デザイン

株式会社ベネッセコーポレーション 商品安全審査センター

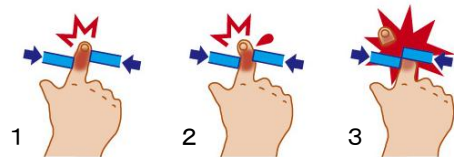
プロジェクトの目的

- ・昨年度得られた結果をもとに、保護者に「深刻な危険を伝える」安全表示とは、どのようなものであるかを、複数の側面から検討した。
 - (1) 表示にはどのような内容が必要か
 - (2) 表示の意図は正確に解釈されているか
 - (3) 危険を示す画像を入れることは効果的か
 - (4) 危険／安全行動を示すマークと、マークに付随する文字表示の内容の検討

実施方法

- ・末子が0～3歳の母親150人を対象に、表示でよく用いられる「指はさみ」(下例)「小さな子ども」「小さな部品」「大きなケガ」といった言葉の解釈を尋ねる等のオンライン実験を実施した。

a) 「指はさみ」という表示でイメージするのは？

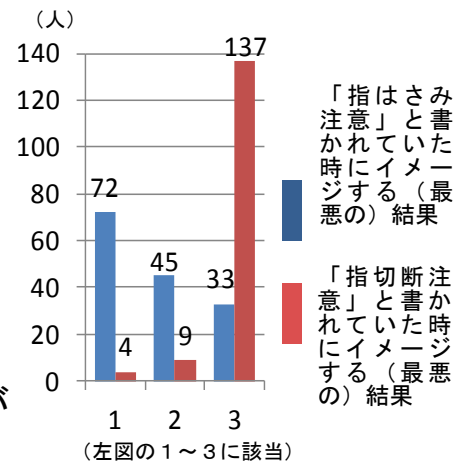


b) 「指切断」という表示でイメージするのは？

- ・ベネッセの顧客ウェブサイトを通じて、601人の母親に対し、危険／安全行動を示すマーク(実験用)、マークと文字表示の併記等に対する意見を尋ねた。

結果

- ・表示には、安全行動の指示(例:「手の届かない所に」「飲まない」)だけでなく、起こりうる危険な結果、その理由も書いたほうが、保護者の安全行動を喚起する
- ・「指はさみ」(右図)「小さな子ども」「小さい部品」「大きなケガ」といった言葉は解釈が大きくばらつく。具体的な表現が必要。
- ・製品の危険な部位等を示す写真を併記することで、注意をより惹起する効果があると示唆された。
- ・マークには、「子どもが危険にさらされる」ことを示すイメージがあるほうが効果的、等の結果が得られた。



今後の展望・展開

- ・実験レベルで、保護者に対してより注意を喚起しやすい表示の条件が複数得られたことを受け、今後は、保護者に安全情報を伝えるためのコミュニケーション・ガイドラインのような内容をまとめ、リスク・コミュニケーションの基礎資料として広く普及させることを検討したい。